

我等の本願

我が団員には色々な身の上の方がいる。人間である以上、もちろんそれは当然ではあるが、色々な境遇や、個性等が、皆違っているのに、同一平等なる南無阿弥陀仏が生きて、同一の光が輝き、同一の喜びを持ち、平等の道をそれぞれの上に成就してゆくのを拜むことは、嬉しくも有難いことである。

同胞よ。皆それぞれの世界において、如来本願の真実を輝きあらしめてくれ。如来の大悲は苦惱において淳く、金剛不壞の信力は、如何なる現実にも勝ちつづけてゆくことを立証してくれ。これ誠に、光明団員の本願である。

我慢強い姑を持つて泣く若い婦人の訴えを聞く時、「処女よ、求道せよ。結婚までにごうご大信心を獲得して、タンスの底には聖典を唯一の荷物として嫁いでくれ」と念じないではいられない。

一番立派な女をと願ひ、選つて選つて娶つたはずの妻が、世にも悪妻で、時に怨婦、毒婦であり、自分の仕事に端から墨をぬられているような男がある。離縁も出来ず、帰りもせず、まことに「妻の悪い」は六十年の不作である。

悪い子供を持つた親の不幸。親のない不幸な淋しい貧しい子。

若い身空で未亡人になり、幾人かの子供をつれて、再婚も出来ず、一生を戦いぬかねばならぬ人もある。

病弱な人、長い病床の人。

足が悪かったり、手が不自由だったり、不具な体をかかえて悩み苦しむ人。

1

不身持な、だらしのない夫、病弱な夫、不甲斐ない夫、悪逆な夫、等々を持つて泣く多くの妻。

金持、家庭平和、等々が幸福な人たち。

挙げて来れば際限がないが、そうしたそれぞれの立場で、苦楽順逆の一切を超えて、一筋に念仏して、如来本願の尊厳を、念仏生活の權威を、身をもつて実証する人こそ、我が純正光明団員である。

「今日から、貴女あなたと私と変わりましたよ。私が貴女の代りに、△△家の奥さんになつてゆきましょう。貴女は本部に帰つて、私に代りなさい。」

「私には、そんなことは出来ません。」

「出来ても出来なくても代つて下さい。私には出来ます。貴女は××に対して怨を持ち、復讐をしようと思つていたのに、今はとても出来ないと投げています。しかも貴女のお顔は輝いていない。私が代つて真の仇打あだうちをやります。さあ代つて下さい。とかく代つて下さい。出来ても出来なくても、代る気になつて下さい。」

「それでは代りましょう。」

「やつと代る気になりましたか。それでは、今日から私が△△家の奥さんですよ。そこで、貴女に次ぎの三ヶ条のことを命じます。」

一。光明と聖光と両方を読みなさい。出来るだけ度々、憶えてしまいうくらい読みなさい。

二。朝夕、仏前で、そうですね、貴女だから……まず二十分以上、勤行念仏なさい。
三。貴女の夫をして、世界一の妻を持ったと言わしめなさい。

以上必ず実行なさい。××を決して怨んではなりません。貴女が○○村の燈明台となった時、初めて私の言ったことがわかります。怨みが晴らされたのです。」

「やります。必ず實行します。」

「それで私は貴女になったのです。私は貴女になって、貴女の世界を生かしきらねばならない。その代り貴女がして下さるのです。」

「わかりました。それでは、これから出発します。行って参ります。」

「それでは元氣で行っていらっしやい。許された時は又帰って来なさい。」

これは、近頃ある団員との対話の大意である。これは決してこの方一人ではない。人は貪欲中心に生きるか、如来中心に生きるか、二つしかない。念仏中心の生活者も決して、衣物を着ないのではない。食物を摂らないのではない。御恩を着食するのである。

人生は楽しむためにあるのではない。苦しむためにあるのではない。苦楽を超えて、念仏一道を生きる為にあるのである。そのことが言葉だけでなく、話だけでなく、身をもって、事実の上になされるべきである。

無駄口の多い者は必ず、人格の光、念仏の光を消すこと、珠に泥を塗るが如し。必ず人に飽かれる。

怨にも合掌をもつてし、恩にも合掌をもつてし、一切に合掌念仏をもつてする時、2 生きる道必ず開く。怨に怨をもつてし、口に口をもつてし、我慢に我慢をもつてし、非道に非道をもつてする者は、如来のみ胸に刃をもつて向うものである。

如来に反逆するをもつて本罪とする。最も恐るべし。最も恐るべし。

氷は熱によつて解け、深山の雪は春の陽気によつて解けて谷川の水となる。

久遠劫来の煩惱の氷は、宿善開發して善知識の教えに会い、一念帰命によつて解け初めて、解けて流れて菩提の水となる。その時、信心歡喜、歡喜の何ものであるかを
知るであろう。

もしその歡喜の光、その周囲の人の胸に反映して、隣人の胸の氷をも解かしはじむるに至つて、生きることの真の歡喜がわかるであろう。光明団々員の使命發揮の行歩はここにその一步を出發したのである。

人は必ず賞讃を求めぬ。汝は一体、誰にほめてもらいたいのか。

妻に真に求むるならば、子供に真に求むるならば、「真の念仏行者になつてくれ」とそのみ一つを求めよ。求め続けよ。一を求めざるものは多を求むる。多くを求められたものは混乱する。

何よりも念仏を高く買え。念仏行者を高く買え。猫は黄金を顧みずして鯛に走る。果してその日常、念仏と、念仏行者を、高く高く買いたるか。真に高く買いたるか。

家庭、同僚間、友人間等、常に一緒にいるものには、口舌の仏法もの言はず、身の光のみ、ものを言う。口に勝つて、事実に敗ける者は、未だ真の行者に非ず。信者はあまりに多く、行者はあまりにも少い。

常に、念仏は世尊の生命いのちにして、龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、法然、親鸞等の永遠にわたる大聖者の生命なりしことを憶うべし。

法の威力は人格によつてのみ生れる。

嫉妬する者は必ず、嫉妬されるものよりも低し。嫉妬されても嫉妬すべからず。嫉妬するものを悪むべからず。黙して汝の道を行け。

本来に真剣に求道する者は必ず一度狂者扱いにされることあるべし。悲しむべからず。今一歩行けばそれらの人は沈黙し、やがてその讚美者と変わる。

歴史を見よ。聖賢は必ず、世のつまらぬ者によつて攻撃せられ、迫害せられた。しかも聖賢はそれを憎まず。

温室のものに香りなし。野生のものは必ず高き香りを持つ。荒野、山野は、風雨にさらさる。

念仏の子よ。安価なる世の賞讃と、人生相對の幸福とを求むることなく、ただ、真の仏弟子たらんことを求めよ。

ああ、我をして真の仏弟子たらしめたまえ。教主世尊よ。聖人よ。